

九州方言推量・打消助動詞活用分布相

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2332983>

出版情報：文學研究. 36, pp.183-204, 1948-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

九州方言推量・打消助動詞活用分布相

吉 町 義 雄

- 一 九州方言未來助動詞活用分布相
- 二 九州方言推量助動詞活用分布相
- 三 九州方言打消助動詞活用分布相

一

『口語法調査報告書』第二條は四段活用の動詞を未來に用ゐた「書カム」等を「書カウ」等と云ふかの回答が扱つてあり、第三條以下に上二段以下各種活用同形が助動詞に至るまで含まれてをり、『口語法分布圖』は第一（四段）、第二（下二）、第三（加變）、第四（佐變）が参照される。

第一圖によると四段「書コー」（黄）は東北・東海以外の全國を風靡し、「書クベー」（赤横線）は山形・福島、「書クベー」（赤縦線）は見當らず、「書カーズ」「書カズ」（赤横線は）愛知一部、「書カー」（青縦線）は愛知・島根一部、「書コー」「書カー」並用（黄地青縦線）は千葉・愛知一部、「書コー」「書カズ」（黄地青横線）は山

梨・静岡全部と愛知一部、「書クペー」「書クペー」(赤縦横線)は岩手、「書カー」「書クペー」(赤横青縦線)は東京一部になつてゐる。

上二段は香川から近畿以東は「起キョー」等であり、徳島・愛媛では「起キョー」を混ぜ、高知では「起キョー」を混ぜ、中國西部は「起キョー」等だが尙「起キョー」等を混ぜ、九州は大抵「起キョー」だが稀に「起キョー」「起キョー」を混ぜる。其他「起キョ」「起ツキョ」「起キョ」等が散在するが、宮崎には「起キョ」等が、佐賀には「起キョー」等がある。

上一段は近畿・四國以東は「着ョー」等と云ひ、中國は「着ョー」で稀に「着ョー」を混ぜ、九州は大抵「着ョー」で稀に「着ョー」を混ぜる。其他「着ウ」や「着ヨ」が散在するが、筑前・佐賀・熊本・大分・宮崎に「着ロー」があり、宮崎・鹿兒島に「着ロー」がある。

第二圖によると専用七、並用八に分けてあり、近畿以東は大抵「受ケョー」(黄)であり、中部・近畿・四國の一部と中國西半は「受キョー」(樺横線)、九州は「受キョー」(樺縦線)であるが宮崎一部は「受キョー」並用(樺縦横線)そして福岡は報告不明(白)になつてゐる。其他「受クペー」「受ケルペー」「受ケーズ」「受ケロー」等が東日本に見られ、各種並用が所々に存する。

加變と佐變は此處へ繰返す必要がない。

奈變は全國的に「死ノー」である。良變も勿論四段活用は周知。

『口語法別記』は右と大同小異である。

『九州方言調査表』(回收六百通) 8頁助動詞第六欄上に

未來は入りユ^リ・見^ル・見^ル等の如く云ふか、

入りヨ^リ・見^ル等の如く云ふか。

と刷込んだに對する回答模様は別表12の通り。九州全般としては古風「ユ^リ」が保たれてゐるが、福岡北半と對馬は西國的「ヨ^リ」が進出し、鹿児島は南國的「ロー」良行四段の跋扈を認めねばならぬ。

註

別表12「見ヨ^リ」と書いて來たものも「入りヨ^リ」と並記されたものは前後關係よりして「見ヨ^リ」に算入。「入ロー」と並記のものは「見ヨ^リ」に算入。又「ユ^リ」とのみしたものは「見」「入」兩方へ算入。又「入ヨ^リ」は捨てた。

福岡縣浮羽郡御幸村「シリユ^リ 見ルといふ語少く多くシルといふ語で代用する」

松下大三郎博士『標準日本口語法』昭和五年二月の一八八頁では肯定未然の七方式の五として「ウ」の下へ「ズ」を附けて「行かうず」などの如くいふ。文語の「行かんず」と同様である。九州及び愛知縣あたりに行はれてゐる。

「思はるる」式の文語活用を口語文へ交へるのは品がよいのかも知れぬが、かゝる二段古形を土着方言とする西國では一方に新形ラ行四段化は「見せろ」と迄働かしてゐる現實である。

二

調査表 8頁助動詞第七欄上に

推量に於て書クローの如き形をとるや。

讀ミツローの如き形を用ゆるか。

と刷込んだに對する回答模様は別表3の通り。

黒刷第二回補遺回答表(回收二百二十通)に

七 未來推量「書くだらう」を 書クロー の様に申しますか。

八 過去推量「書いたらう」を 書イツロー ケイツロー と言ひますか。

と刷込だに對する回答模様は別表45の通り。

かくて現在推量は九州としては「ロー」「ジャロー」「ヂャロー」が特徴となるが、更に左の様相に分れる。

ロー——筑後、兩肥、豊後

ドー——肥後

ジャロー

ヂャロー

筑後、兩肥、兩豊、(日向)諸縣

ヤロー

コ

筑前

過去推量は「ツロー」が九州式であるが、更に

ツロー——兩筑、壹岐、對馬、薩隅

タロー——兩肥、兩豊

なる分布が解る。

註 別表3 「見ロー」等と答へたのは「書クロー」に、「見ツロー」等は「讀ミツロー」に算入。「書キョロー」「讀ミョロー」「讀ドロー」等は捨てた。

「書クイロー」佐一、「ケーツロー」福後二、「ケツロー」熊一。

「讀メツロー」長對一、「讀シツロ」鹿隅一。

別表45 算入外のものに「書クツチャロー」長一、「書クダロー」長一、「書クヨ」鹿薩一、「ケーチロー」鹿隅（口之島）、「キヤータヨウ」鹿薩（里村）。又「書イチョロー」數通は捨てた。

「書ク」は「書ツ」ともなる。「ケー」は「キヤ」 「ケ」ともなる。

福岡縣教育會本部（黒岩萬次郎氏）『福岡縣内方言集』明治卅二年十二月の二〇六―七頁「つらう（久）（井）（福）（糸）つらんの轉訛ニテ已然ノ事ヲ推測スルキニ用フル助辭ナリ例ヘバ寒かつたであらうトイフコトをむかつつらうトイフガ如シ」新村出博士「足利時代の言語に就いて」（明治三十八年四月『國學院雜誌』第十一卷第四）二二―三頁（昭和二年十二月『東方言語史叢考』所收三四七頁）「今では日本の中央部地方の方言に「讀んづら」「書いづら」「何處へ行つづら」と「つらん」と云ふ形から出て來た「つら」と云ふ過去の推量の形を用ゐて居ります。「中略」今でも中國や九州では「つらう」と云ふ形になつて遣つて居ります。」

山田孝雄博士『日本口語法講義』大正十一年十一月初版一二二頁「土佐などの方言に「あるらう」「面白かつつらう」などのやうに用言又他の複語尾につけて用ゐられるものもある。（「あるらう」は文語の「あるらむ」「面白かつつらう」は文語の「面白かりつらむ」である）」

春日政治博士「桃山時代の口語に就いて」（昭和二年十一月【福岡】國語漢文學會にて）一三頁「唯ツを置かないで動詞に

直ぐこのラウをつげる形は福岡には餘り聞きませぬ。これはもうチト南の方へ行くと——長崎若しくは鹿児島ですか——あるやうに聞いて居ます。「やすういくラウ」と直ぐラウをつげる。」

松下大三郎博士「標準日本口語法」一九四頁「文語の「らむ」は九州四國では「らう」となり駿遠參甲信邊では「ら」となつて残つてゐる。」

安田喜代門氏「國語法概説」昭和三年三月初版二二八頁「ラムは土佐や長門などには、アルラウ、面白カツツラウ、降ルラウなどと言ふ由。ツラウは博多言葉にもある。」同「高等國語法」昭和四年十二月初版八六頁「ラウと熟合して破レツラウの様に用ゐられなどして優勢であつたが、今は一部の方言にしか残つてゐない。」九五頁「ラウは室町以後更に衰へ、今は西の方言の一部に行はれるだけである。」

東條操教授「本州西部の方言」(昭和九年十二月「國語科學講座」) 關係記述參照。

永田吉太郎氏「推量に関する諸形式——方言語法の問題(六)——」(昭和十年二月「方言」第五卷第二號) 8頁下「ラムからラウを経てローになつたものもあるが、新潟縣及び高知縣に用ゐられ、形容詞の連體形にも直接する。鹿児島ではドーともドともいふが、ドは宮崎縣及び熊本縣にも行はれてゐる。」

三

報告書第三十一條は動詞を打消に形作るには「聞カナイ 聞カナイデ 聞カナクバ 聞カナケレバ 聞カナカク
ク 聞カナカラウ」など云ふか、又は「聞カヌ 聞カヌデ 聞カズバ 聞カネバ」など云ふか、又此の打消の「ヌ」
を「シ」と發音するかに就てであり、分布圖第五「ぬ」「ない」等ノ分布圖、第八「なんだ」「なかつた」等

ノ分布圖」第九「「いで」「ないで」等ノ分布圖」に表されてゐる。

第五圖に依ると「ナイ」「ナエ」と云ふ地方（青）は東日本大部、又「ヌ」（黄）は長野大部、群馬・山梨・静岡・京都・大阪一部、「ン」（黄横線）は西日本大部、「ナイ」「ナエ」「ン」並用（青地黄横線）は秋田全部、山形・新潟・群馬・埼玉・愛知・岐阜・奈良・広島・島根・香川一部、北九州數箇所。

第八圖に依ると「ナカッタ」（青）は東日本大部、奈良・香川一部、長崎本土、「ンカッタ」（薄青横線）は新潟・宮崎一部、「ナンダ」（黄縦横線）は本州西部、四國大部、山梨全部、長野・静岡・福岡一部、佐渡、「ザッタ」（黄）は島根・宮崎一部、「ダッタ」（青縦線）は島根一部、「ンダッタ」（青横線）は熊本全部、「ンヂッタ」（青斜線）は佐賀、「ナカッタ」「ナンダ」並用（緑）は岐阜全部、群馬・埼玉・愛知・岡山・広島一部、「ナンダ」「ザッタ」並用（黄横線）は高知全部、「ナカッタ」「ダッタ」並用（薄青地濃青縦線）は島根一部、「ザッタ」「ンヂッタ」並用（黄地青斜線）は福岡大部、そして別種の云ひ方や報告不明不着の地方（白）が九州では大分・鹿児島全部、宮崎大部、長崎一部になつてゐる。

第九圖に依ると「ナクテ」「ナクッテ」「ネクテ」と云ふ地方は新潟一部、「ナイデ」「ナエデ」「ネデ」は山形・新潟・埼玉一部、「ンクテ」「ンクッテ」は新潟一部、「イデ」（黄）は三重・兵庫全部、富山・和歌山・岡山・愛媛・福岡一部、「ンデ」（樺横線）は山梨・佐賀・熊本・鹿児島全部、愛知大部、広島・宮崎一部、「ナクテ」「ナイデ」又その轉訛（緑）は東日本大部、奈良・香川一部、「ナエデ」「ンクテ」は新潟一部、「イデ」「ンデ」（黄地樺横線）は西日本（九州以外）大部、宮崎一部、「イデ」「ント」は大阪大部、京都・和歌山一部、「ン

「ナンデ」は長野大部、愛知一部、「ーデ」「ン」は山口、「ナイデ」「ンデ」は新潟一部、「ンデ」「ンクテ」は新潟一部、「ナクテ」「ナイデ」「イデ」は山形一部、「ナクテ」「イデ」「デ」は島根・宮崎一部、「ナクテ」「ナイデ」「ンデ」「イデ」は茨城・埼玉・愛知・岐阜・岡山・広島一部、「ヂー」「ヂ」は宮崎一部、そして報告不明不着地方は九州では大分全部、福岡・長崎・宮崎大部。

報告書第三十二・三十三・三十四條は加變・佐變動詞の打消であつて、分布圖第六・七・十・十一・十二と共に既知事項である。

別記には極概略のみが見られる外に、「マイ」に就て述べてあるが、此の方の方言様相は逃げてゐる。

調査表8頁助動詞第五欄上に

否定過去はンヂ^ヤタ・ンダ^ツタ・ザ^ツタ(ジャ^ツタ)・ナンダの何れか。

と刷込んだに對する回答模様は別表6の通り。

黒刷第二回補遺回答表に

四 「行かなかつた」を 行カンカ^ツタ と云ふか。行カンニ^ツタ と言ふか。

と刷込んだに對する回答模様は別表7の通り。

かくて過去打消は九州は「ンジャ^ツタ」「ンヂ^ツタ」式で、更に

ンジャ^ツタ・ンヂ^ツタ——兩豊、肥前

ジャッタ・ヂャッタ——筑前、豊岐、對馬、日向

ンダッタ——肥後

ンニョッタ——薩隅

ンヤッタ——筑前

ンカッタ——日向

に特異的と見做せよう。

黒刷第一回補遺質問表（回收三百六十通）に

九 打消接續法の例へば「出ないで置く」は 出ランナ 出ランデ 出ランヂー の何れですか。
と刷込んだに對する回答模様は別表 8 右半の通り。

右に由ると九州は「出ランデ」「出ランナ」式、更に

出ランデ——兩豊

出ランヂ——兩豊、薩隅

出ラヂー——肥前

出ランナ——兩筑、肥後

に旺盛と結論出來よう。

茶刷補遺質問表に

七 否定接続に於て例へば「知らないで分るものか」を 知ラデニヤ分ルモンカ と云ひますか。
と刷込んだに對する回答模様は左の通り。

○知ラデニヤ 福前² 後² 佐⁵ 長⁷ 對¹ 熊²¹ 鹿^隅 1 シラデナ長對¹ シラジニヤ 熊² 宮日² シラヂイニヤ 佐¹
長¹ シラズニヤ 長¹

○知ランデナ福後¹ 佐²

同表に

五 例へば「行かねばならん」は 行カンバ 行カニヤ 行カナ 行カヂヤ 等の何れを用ゐますか。

と刷込んだに對する回答模様は別表 8 左半の通り、九州全般が「行カニヤ」式であるが、兩肥は「行カンバ」が顯著。

同表に

六 否定假定に於て例へば「賣らないなら」を 賣ランナ 賣ランニヤ 買ワン と申しますか。

と刷込んだに對する回答模様は左の通り。

○賣ランナ 福前⁶ 後³ 佐¹ 長² 熊⁹ 鹿^薩 2 宮日¹ 大後² ウランナ 福豊¹ 前⁷ 後³ 熊⁴ 鹿^薩 2 宮^諸 2 大後¹ 前¹
ウランニヤ 福豊⁵ 前² 長¹ 熊¹ 鹿^薩 3 隅⁴ 宮日¹ 大後¹

○賣ラナ福豊1前1長1鹿薩1大後1 ウラニヤ福豊4前7後2佐3長6對2熊7鹿薩1宮諸1日6大後18前5

○賣ランギラ長1 ウランギ長1

右に由れば九州は「賣ラニヤ」が肥後は「賣ランナラ」が優勢となる。

青刷補遺回答表（回收二百五十通）に

九 又否定接続は例へば 遊ベンコニ戻レ 等の様な言ひ方を致しますか。

と刷込んだに對する回答模様は左の通り。

○遊ベンコニ福豊5大後2

○遊バンヅクニ福豊1大後1前1 ツク福豊1 ツギ長1

茶刷補遺回答表に

五 又例へば「降りはせん」を 降レバセン の様な言ひ方を致しますか。

と刷込んだに對する回答模様は左の通り。

○降レバセン福豊3大後4

○降リハセン鹿隅1 フリヤセン福豊1前7後1佐1長對1熊4鹿薩2隅3 フリヤセン福前1長1熊1大後1

○降ラセン福豊1長1鹿薩1隅1宮諸1

茶刷補遺質問表に

二 否定終止の例へば「讀まん」の如きを 讀マジ と文語式に言ふ事がありませうか。
と刷込んだに對し肯定回答左の通り。

【福】 井 1

【佐】 佐郡 1 杵 1

【長】 北高 1 北松 2

【熊】 球 1

【鹿】 薩 1 鹿市 1

肝 1

【宮】 都 1

【大】 野 1 目 1

又「行カンノク」(行かないで置く)等も特徴となる。

註 別表 6 「ンチャッタ」と「ジャッタ」のン有無は全部正確には行かぬらしい。又チとジも然り。今はンの有無に依つて整理算別してをいた。並用又は全用も少數ある。

「ダッタ」大後一、「チャッタ」大前一、「ンニヤッタ」鹿薩一。

福岡縣京都郡泉村「ヂヤッタを用ふ、少し上品な人にナンダを用ふる人もある」は兩方へ算入した。

別表7 算入外に「行カンヂヤッタ」大前一、「行カラッタ」鹿隅(口之島)一、「行カアッタ」鹿隅(黒島)一。

新村出博士「足利時代の言語に就いて」(二八頁、三五三頁)「之を以て見ると過去打消の助動詞の「なんだ」即ち「行かなんだ」「見なんだ」「取らなんだ」「知らなんだ」などと云ふあの「なんだ」は多分「なつた」(無かつたの略?)と云ふ形から出たと云ふ説がよささうであります。此形の語源説は大分ありますが、今日は略して他日に譲つて置きます。」

春日政治博士「小學方言講義」より(昭和八年三月『文學研究』第四輯)「二二頁「ザッタはザリ(ズアリの約)にタの附いたものであることは言ふまでもない。この講義には例は多くないがジヤッタといふ形が見える。ジヤッタはザッタの拗音化したものである。デアッタのヂヤッタとは全然異なる語であつて、従つて假名遣もザ行とダ行と書別けるべきである。」二頁「現今もこのジヤッタを用ゐ、亦ンジヤッタをも用ゐる。ンジヤッタ(例へば行カンジヤッタ)は重複否定から來てゐて、デアッタの方ではないだらう。」

別表8 右半に於て算入外に「出ラデナ」「出ラデニヤ」熊一三、「出ラデン」熊九、「出ラチン」熊三鹿薩三。

「出ラジー」形の由來が「出ラズニ」からか「出ランデ」からかに就ては永田吉太郎氏「否定形式の概観——方言語法の問題の四——」(昭和九年四月『方言』第四卷第四號)29頁下「佐賀縣や長崎縣の地方ではズがそのニと融合してジになり、「例略」宮崎縣や鹿児島縣では短いジになる。「例略」もつともこれには後に誌すデーチージ「中略」かとの疑もかゝるが、確なことはその地の方から聴かなければ分らない。」

左半に於て算入外「行カザ」大後一前一。

春日博士前掲論文二三頁「行カニヤアコテとも行カジヤアコテとも(共に行カズアランヤといふ反語表現)いふニヤアはネバの轉であることは勿論、ジヤアも昔ザア又はザといつたズハであらう。」

三九重松博士「口語の研究」(明治三十二年四月『國學院雜誌』第五卷第六)十三頁(昭和七年四月『文法論と國語學』所

收) 18第頁「中國九州の一部には一段活動詞の名詞法に第四變化を用ひ「ヤ」「ベ」をつける處がある。

見ハセン を 見レハセン 見レバセン

出來ハセン を 出來レハセン 出來レバセン

強意の打消の場合だけが名詞法の變例には違ひない。」

昭和二年八月『音聲學協會々報』第5號11頁「コトタマ往來」43「大分縣では「行きはしないだらう」を「行けばしないだらう」と云ふ。識者も之を筆にさへする。」(森川謙氏)

「讀マジ」等の文語式未來否定を九州で口語に用ゐる記述は長崎版『日本文典』慶長九一—一三年の卷二の二六丁オおよび四三丁オに見える。

「マイ」の九州分布相は「九州方言四段・變格活用動詞分布相」(昭和十三年六月『文學研究』第二十三輯)參照。

參 考

九州方言受身・使役助動詞活用分布相(昭和十九年七月『方言研究』第十輯)

九州方言指定・比況助動詞活用分布相(後出『文學研究』)

九州方言敬讓助動詞活用分布相(同前)

未來助動詞活用分布表 1

見					詞 動	
一口	ユヨ 	一ヨ	一ヨ	一ユ	國	縣
2	1	3	14	4	前 豐	福
5	2	1	31	12	前 筑	
2	0	0	2	37	後 筑	
1	0	1	0	38	前 肥	佐
0	0	0	5	59	前 肥	長
0	0	0	1	2	岐 壹	
0	0	0	6	0	馬 對	
0	0	0	0	100	後 肥	熊
12	1	0	8	9	摩 陸	鹿
6	0	0	5	6	隅 大	
4	0	0	1	4	縣 諸	宮
2	0	0	2	9	向 日	
7	6	1	20	30	後 豐	大
0	2	0	1	7	前 豐	
42	12	6	96	317	州	九

表布分用活詞動助來未 2

レ 入					詞 動	
一 口	ヨ 二 1	一 三	一 四	一 五	國	縣
3	2	1	11	4	前 豐	
3	2	1	16	13	前 筑	福
1	0	0	18	39	後 筑	
0	0	0	0	37	前 肥	佐
0	0	0	5	49	前 肥	
0	0	0	1	1	岐 壹	長
0	0	0	6	0	馬 對	
5	0	0	0	91	後 肥	熊
16	1	0	4	3	摩 薩	鹿
5	0	0	1	3	隅 大	
1	0	0	1	4	縣 諸	宮
1	0	0	1	10	向 日	
1	8	1	16	41	後 豐	大
1	1	0	0	11	前 豐	
37	14	3	80	306	州	九

表 布 分 用 活 詞 動 助 量 推 3

讀			書		詞 動	
ロウ ツ	ロン ツ	ロミ ツ	ロイ ツ	ク ロ	國	縣
0	0	1	0	1	前 豊	
2	6	5	5	2	前 筑	福
7	2	4	4	3	後 筑	
0	0	1	0	4	前 肥	佐
0	0	0	0	17	前 肥	
1	0	0	1	0	岐 壹	長
0	0	1	0	0	馬 對	
2	0	4	1	13	後 肥	熊
0	9	1	4	1	摩 薩	鹿
0	3	4	1	3	隅 大	
0	2	1	1	0	縣 諸	宮
0	0	1	0	1	向 日	
0	1	0	1	37	後 豊	大
0	0	0	0	1	前 豊	
12	23	23	18	83	州	九

表 布 分 用 活 詞 動 助 量 推 4

(ク) 書					詞 動	
一コ	下	一フ	否	一ロ	國	縣
1	0	0	7	0	前 豊	福
4	0	0	11	0	前 筑	
1	0	0	10	1	後 筑	
0	0	0	8	0	前 肥	佐
0	0	0	16	5	前 肥	長
0	0	0	2	1	岐 壹	
0	0	0	1	0	馬 對	
1	3	7	22	3	後 肥	熊
0	1	0	6	0	摩 薩	鹿
0	1	1	8	1	隅 大	
0	0	0	3	0	縣 諸	宮
0	0	2	6	0	向 日	
0	0	1	16	9	後 豊	大
0	0	0	1	1	前 豊	
7	5	11	117	21	州	九

表布分用活詞動助量推 5

イ 書			ク 書			詞 動	
一ロタ	否	一ロツ	ロヂ 一ヤ	ロジ 一ヤ	一ロヤ	國	縣
0	3	0	0	1	1	前 豊	
0	2	18	2	1	3	前 筑	福
2	1	12	4	0	0	後 筑	
7	3	4	2	5	0	前 肥	佐
9	17	2	2	5	0	前 肥	
0	0	3	0	0	0	岐 壹	長
0	0	2	0	0	0	島 對	
9	24	4	0	0	0	後 肥	熊
1	2	8	1	1	0	摩 薩	鹿
2	2	7	0	0	0	隅 大	
4	2	0	3	0	0	縣 諸	宮
1	3	2	0	0	0	向 日	
10	15	4	1	6	0	後 豊	大
4	2	0	1	2	0	前 豊	
49	76	66	16	21	4	州	九

打消助動詞活用分布表 6

ナ ン ダ	ン ヤ ッ タ	ン チ ャ ッ タ	ン ダ ッ タ	ジ ャ ッ タ	ザ ッ タ	詞 動 助		
						國	縣	
5	1	17	1	7	1	前	豊	福
1	9	24	4	24	9	前	筑	
1	0	34	2	17	0	後	筑	
0	1	30	7	11	0	前	肥	佐
0	1	41	3	24	0	前	肥	長
0	0	2	0	2	0	岐	壹	
3	0	1	0	4	2	島	對	
1	0	43	62	28	3	後	肥	熊
0	2	25	3	11	2	摩	薩	鹿
0	0	14	0	6	0	隅	大	
0	0	9	0	1	4	縣	諸	宮
0	0	7	0	7	5	向	日	
1	0	49	2	19	6	後	豊	大
0	0	11	0	2	2	前	豊	
12	14	307	84	163	34	州	九	

7 打消助動詞活用分布表

ンカッタ	ンヤッタ	ンニヤッタ	ンチヤッタ	ンダッタ	ンジャッタ	チヤッタ	ダッタ	ジャッタ	ザッタ
0	3	0	1	0	2	0	0	0	0
0	10	1	0	0	2	3	0	2	0
0	1	0	6	0	2	3	0	0	0
1	0	0	3	1	8	0	0	0	0
2	1	0	8	0	14	0	0	1	0
0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
1	0	1	1	8	13	0	1	5	1
1	1	5	3	0	1	0	1	1	0
1	0	8	1	0	1	0	0	0	0
4	0	0	2	0	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	0	0	1
6	0	0	7	0	15	0	0	2	1
1	0	0	2	0	3	0	0	0	0
24	17	15	34	9	62	6	2	11	4

表 布 分 用 活 詞 動 助 消 打 8

カ 行					ラ 出				詞 動	
ヤヂ	ヤニ	ナ	ナン	バン	ージ	ナン	ヂン	デン	國	縣
3	9	2	1	0	0	4	1	12	前 豐	福
4	21	3	4	0	0	25	0	6	前 筑	
3	6	0	2	0	0	16	1	4	後 筑	
3	7	1	0	8	13	4	0	3	前 肥	佐
3	8	4	0	11	15	1	1	7	前 肥	長
0	0	0	0	0	2	0	0	0	岐 壹	
0	2	0	0	0	0	0	0	2	島 對	
3	21	0	0	14	2	13	0	10	後 肥	熊
1	5	1	0	0	1	0	9	4	摩 薩	鹿
0	5	0	0	0	5	2	8	5	隅 大	
0	2	0	1	0	7	1	1	2	縣 諸	宮
1	8	2	1	0	3	0	1	0	向 日	
0	22	3	0	0	0	4	25	17	後 豐	大
0	6	1	0	0	0	1	5	5	前 豐	
21	124	17	9	33	48	71	52	77	州	九